

## 支部だより

2016.4.24. No.10 東京支部事務局

### 定例研究会におでかけ下さい

☆第一回目の雰囲気をお伝え致します。ご持参頂いた作品の各作品について斉藤先生の講評を頂きました。

内容をもっと詳しく知りたい方は、事務局にご連絡下されば何方の作品かお伝えし、相手方に直接細かな内容をお訊ねできるかと考えております。

\*\*\*\*\*

[A] ハーフ ND は自然の姿を損なわないように使う。効かせすぎない。境目や空に立木が出ている時は特に注意。かかっているのが分からないのが最善。

[B] 上から木が覆っている。『トンネル効果』視野を狭める。雄大さが欠ける弱点にもなる。

[C] 定番の場所では見方を変える。『定番崩し』を心掛ける。脚立の利用なども角度が変わっていい。

[D] トリングは画素数を減らす。大伸ばしが出来ない。避けたい。撮るときのフレーミングに気を使いたい。

[E] 教えて貰った場所、狙い場所に拘りすぎていると、『出会いの瞬間』の作品作りに弱くなる。瞬間のチャンスを見逃さない努力もしたい。

[F] 実際視と作品との違いに気づく。実際にはきれいでも、写真では綺麗にできる。

[G] 一枚の作品の中に『動と静』を生かすのはいい撮り方。

[H] 海の撮影はエネルギーを画面に入れるか、おとなしさを入れるか、しっかり意識して撮る。

[I] 作品を見る人の目線は、明るいところに先ず行く。また上から下に行く。撮影時にも考えてみよう。

[J] 説明しなくても撮影者の想いが伝わるように何を写すか構図を考える。

[K] 露出には機械的露出(カメラの適正露出)と神秘的重苦しさ等、心の様子、感じ方を表す『感情的露出』がある。

[L] 実際の風景の色は光の三原色、プリントは色の三原色。違いを意識する。特に空の色。

[M] 海の撮り方。波の撮り方。ハイスピードで波を止める。スローシャッターで波が生きる。デジタル時代の表現の仕方

の工夫を利用する。

[N] 氷を撮るときは冷たいカチカチの硬さの中にある柔らかさや立体感も表現したい。

[O] デジタルで手持ちの場合、アングルや ISO 感度の自由さの利点を生かす。手ぶれは作品にならない。

\*\*\*\*\*

\*\*\*\*\*

☆ このところ支部定例会、作品展出展作品にもデジタル作品が増えました。今回の斉藤先生のご指導の中にもデジタルに関わる内容がかなりありました。全体としてのまとめで『画像処理はしてもいいが、過ぎたるは及ばざるが如し』とのことでした。

### 学び・感想

\*\*\*\*\*

泉屋ゆりこ

第一回講評会は、斎藤友寛先生をお迎えして開催されました。ただ「新しい先生」というだけでなく、どんな問題についても明快な解説がなされたため、この日は熱気に満ち緊迫感にあふれた講評会となりました。

わたしは5枚を提出して講評をいただきましたが、とくに心に残っているのは「露出には機械的露出と心情的露出がある」と「一枚の中に静と動が入っていれば brilliant」というお言葉です。

わたしは今までも露出を全てカメラ任せにしていたわけではありませんが、それでも自分の「心情」に照らして露出を決めていたかといえ、たまにはそういうこともあったにせよ、ほとんどは「〇〇の場合はアンダー気味に・・・」「××の場合は明るくハイキー調に・・・」など陳腐な公式に従って決めてきたのだから、機械的露出となら変わるところがなかったのだと気づかされました。

また、「静と動・・・云々」は、わたしは問題となった作品では「静」であるところの水面から突き出た雪を付着させた枯れ木を撮りたかったのだから、それを引き立たせるための「動」的な subject を探すべきだったのだと気づかされました。

こうした『気づき』を与えてくれる講評を聞いて目から鱗の落ちる瞬間はほんとうに得がたく貴重です。3ヶ月に1度の例会をめいっばい活用できるように日頃から作品を撮る時も選ぶ時も気を抜かず頑張りようと思いました。

(事務局からお願いして原稿を頂きました)